

総 括

夏期日本語教育ディレクター
広瀬 正宜

今年度の夏期日本語教育（サマーコース）は 22 カ国から 126 名の受講生を迎えた。7 月 4 日（金）の登録・入寮にはじまり、7 月 5 日（土）プレイスメントテスト、7 月 7 日（月）授業開始、8 月 15 日（金）に無事終了した。今年は大学内施設の大幅な改築に伴い、大学食堂、ゲストハウス楓風荘の取り壊しがあった。そのため、学生の普段の昼食と講師の滞在先手配に困難を伴った。新しい設備ができるまで、今年の実験をいかし、できるかぎりの工夫をして学生たちを迎えたい。

1. 教務関係

クラス編成

今回はプレイスメントテストの結果、C1 から C8 までの 8 レベルのクラスを開講した。C1 から C4 までの 4 レベルは人数が多くそれぞれ 2 セクションとなり、合計で 12 クラス開講し 24 名の講師が担当した。ディレクターと教務主任が別々に、24 名の講師ひとりひとりの授業を見学し、それぞれフィードバックをおこなった。

他機関による見学

- ・ベネチア大学 マルチェラ・マリ奥特ティ博士（JSPS 外国人特別研究員として ICU アジア文化研究所に所属）

期間中随時、初級レベルの授業を見学

- ・JICE（JICA の外郭団体）ニール・セモール氏（CJCC（カンボジア日本センター）日本語コースマネージャー）

7 月 9 日：（水）初級レベルの授業を見学

10 日：（木）中級レベルの授業を見学

2. 住居

講師の滞在先の問題

海外から赴任する講師 8 名が学内宿舎の利用を希望したが、楓林荘が工事のため使用不可であったため、滞在先確保が非常に難航した。ICU 教員が好意で貸して下さった学内住宅 4 軒とゲストハウスの W108 の計 5 軒に 2 名でシェアするなどして滞在していただいた。来年、再来年もゲストハウスは完成しないため、学内住宅を毎年必要だけ確保できる保証はないことも合わせて考慮し、適切な対応が必要である。

ホームステイの問題

滞在先の家族と合わなかった学生 1 名が、最後の 2 週間はグローバルハウスに 滞在することになった。ホストファミリー、学生双方の同意の上、日割りで 2 週間分の費用を返却してもらい、その費用をそのままグローバルハウスの滞在費に充てた。なお、このことは学内寮に予備スペースを確保しておく必要があることを示している。

3. 健康面

昨年と同様、看護師が H-206 に 7 月 4 日～ 8 月 7 日まで常駐し、学生の通院にも引率した。今年初めての試みとして、置き薬の業者による救急箱を設置した。のど飴、うがい薬も設置し、風邪の初期症状の学生に大変好評であった。暑い日が続いたため、十分水分をとり、熱中症を予防するよう英文の掲示を廊下等に貼り、メールボックスで各学生にプリントを配布した。

特記事項として、ある学生から妊娠 11 週であると登録日に申し出があった。看護師の小嶋さんが、日常的な相談や定期検診への付添いにきめ細やかに対応して下さったおかげで、無事に受講することができた。ただし、看護師がその学生にかかりきりになってしまう懸念があるので、今後は注意が必要である。また、mono(喉の炎症をおこす感染症)に罹患した学生がいた。武蔵野赤十字病院で検査を受けるため数日通院し、欠席はしたものの最後まで受講した。他にも期間中に風邪、胃腸炎、目の痛みなどで通院した学生たちがおり、バスで行くことが困難な場合にはディレクターが自分の車で、または看護師がタクシーを使用して病院に付添った。寮のヘルパーや副手や学生アルバイトにも病院への付添いをお願いしたこともあった。幸い、救急車の出動はなかった。

4. 連絡

学生のメーリングリスト、講師のメーリングリストを作り、情報の共有につとめた。学生のメーリングリストは文化プログラムの案内・宣伝、保険の手続き周知、早期帰国の際の連絡、図書館カード、本の返却呼びかけ、アンケート回答のお願い（今年度は Web フォームで回答する形式を採用）などに使用。講師のメーリングリストには教務、事務連絡送付時に使用した。

以上